

2026年11月17日聖霊降臨後第26主日説教

ダニエル書12章1-4節 a

ヘブライ人へ手紙10章31-39節

マルコによる福音書13章14-23節

昨日は第145教区会がありました。議題の中には北関東教区・東京教区宣教協働特別委員会についての事柄もあり、新しい教区に向けた歩みは、着実に進んでいます。

本日は、聖霊降臨後第26主日です。聖餐式聖書日課B年として、連続してマルコ福音書を読む最後の週となります。来週は、聖霊降臨後最終主日・臨節前主日ですので、福音書はヨハネです。本日の個所が、マルコ福音書の最後の個所に相当するわけではありませんが、本日の旧約日課と福音書の主題は、「最後」あるいは「終わり」といえるでしょう。ちなみに来週は、2024年度の主教巡回日です。

本日の旧約日課は、《かっこ》の中も含めれば、ダニエル書の最後の部分です。このダニエル書は預言書ですが、黙示文学にも含まれます。この黙示という言葉は、すこし分かりにくいのですが、神様の意志を伝えるという意味では、預言と同じです。預言が、神様の意志を、誰でも分かるように伝えるのに対して、黙示は、分かる人にだけ分かるように、言葉を換えて伝えます。

本日のマルコ福音書の個所は、小黙示録とも呼ばれる部分の一部です。小黙示録と呼ばれる通り、内容的にはそのままでは分かりにくいところも多くあります。本日の最初、「**荒廃をもたらす憎むべきものが、立ってはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ——**」（マルコ13:14）では、「**荒廃をもたらす憎むべきもの**」とは誰かということが疑問になります。また、この箇所にある「**読者は悟れ**」は、福音書の著者が自分の描いている物語の世界を超えて、直接読者に語りかけている部分です。『聖書』の中でも珍しい個所です。その後には、「**それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。**」（マルコ13:19）ともあります。先の「**荒廃をもたらす憎むべきもの**」が誰であるかという問いと合わせて、それほどまでに注意を呼び掛けなければならないような「**苦難**」とは何か、そのことが気になります。

この部分は、時間的にも内容的の切迫した内容を語っているといえるのですが、単に脅すために語りかけているのではありません。20節には、「**主がその期間を縮めてくださらなければ、誰一人救われぬ。しかし、主はご自分のものとして選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださったのである**」とあるからです。「その期間」は直訳すれば、「その日々」です。口語訳ではその通りの訳でした。「**主はご自分のものとして選ばれた人たち**」とは、少し排他的な意味を感じる表現ですが、信仰者と考えてよいでしょう。

「**その期間を縮めてくださった**」も、すこし微妙な感じの表現です。可能なら、苦難の日数をなくしてほしいと思ってしまうかもしれませんが、苦難はなくならな

いが、その日々を減らしてくださるということです。また、気を付けなければならないことも記されています。それは「その時、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちの惑わそうとするからである」(マルコ 13:21-22) ということです。「偽メシアや偽預言者」、それらは言い換えれば、自分たちの望む通りの指導者や理論です。つまりたとえ理性的あるいは善意で判断したとしても、自分たちの枠の中だけで誰かに期待すること、また何かを求めることには気を付けなさいということです。

いずれにしても、これから苦難が起こることの目的は、単なる苦しみではなく、救いです。その救いとは、イエス様の十字架と復活を信じる人に約束される永遠の命に他なりません。なぜそのように信じることができるのか、あるいは信じることが大切なのか、それはイエス様の十字架と復活が、それを信じるものに問いかけるからです。もし世界に苦難があるとすれば、それが自分の苦難であれ、他の人の苦難であれ、そこに何を見出すかと問いかけるからです。

イエス様の示した十字架と復活が示すことは、自分の苦難にただ絶望することでも、他者の苦難を見て、もし自分にそのような苦難がなかった場合に安心することでもありません。わたしたちがイエス様の十字架の姿から見出すことからは、それが自分であれ他者のものであれ、苦難を解決するための知恵と力です。それらは、主なる神様が与えてくださる本当の命の約束から得られます。だからこそ、偽メシアや偽預言者に頼ることなく、すなわちすべてを人間の思いで解決しようとする必要もなく、歩むことができます。

今わたしたちの周囲には、戦争のような大きな苦難はなかったとしても、わたしたちの住んでいる世界には、いたるところで苦難と呼べる事柄が続いています。それらの苦難が今すぐにでも終わるように祈り続けること、努力し続けることが大切です。ある戦いはもうすぐ1000日に及び、他の戦いも一年を超えて続いています。どれだけわたしたちが祈り努力しても、すぐには解決しないかもしれません。しかし、わたしたちが本日の福音書から受け取る主なる神様の言葉は、失望ではありません。「主がその期間を縮めてくださらなければ、誰一人救われない。しかし、主はご自分のものとして選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださったのである」とある通り、主なる神様の本当の気持ちは、苦難があったとしても、すべての人の喜びと救いであるからです。

もうすぐ教会歴が変わり、また一般的な年も変わり2025年を迎えます。20世紀に生きている時は夢の世界のように思えた21世紀も、4分の1が過ぎようとしています。それでも世界には苦難があります。しかし、約2000前のイエス様の出来事は、今もこれからもわたしたちに希望を与えてくれます。その希望のもとに、これからも教会に集まり続けたいと思います。